

裸一貫で野生に挑むドキュメンタリー 特別付録 カメ五郎の自給自足野営DVD

Fielder

フィールダー
SAKURA MOOK 92
vol.31



単独忍び猟から
クマ対策まで

糧を得るための現実を学ぶ

獲物生活の勧め

写真家・石川竜一×登山家・服部文祥
2人で歩いた「出猟日記」も収録

自給自足 技法

〔天特集〕創造力は権力を超える
火を起こし、糧を見つけ、外で寝る

食料は一切持ち込まず
山で4日間を過ごす
カメ五郎が挑む
原始的野営を
フルHDで追体験!

すぐそこにある天然素材で
生活の場を作る
**ブッシュクラフト
野営術**
この世の原理を
ブッシュクラフトに応用する
**野営エキスパート
スキルズ**
たった1枚のタープで
あらゆる環境に適應する
タープ設営型録
野営をより楽しむための基礎知識
焚火理論

遠狩 征獵 記

BUSH CRAFT X HUNTING

ハンターなら一度は、
自分の実力を試してみたくなるだろう。
見ず知らずのシビアなフィールドで独り。
開拓に許された時間はたった2日。
ブッシュクラフトスキルを活用し、冬季野営による狩猟に挑む。

氷点下の世界でエゾジカを追う

〔北海道〕

弾丸狩猟ツアー



Bush Craft inc.代表
相馬拓也

自社のオリジナルギアから世界の隠れた名品に至るまで、サバイバル環境で本当に使えるアイテムを取り揃える「Bush Craft inc.」。取り扱われるアイテムは全て独自のフィールドテストをパスしているの、ブッシュクラフトの痒いところにも手が届く秀逸品が揃っている。http://www.bushcraft.co.jp/

意外と知らない便利ツールで
猟果を妄想する狩猟遠征前夜

遠征の戦略は、PCでグーグルマップを覗き、現地をざっくり調査することから始まる。ブッシュクラフトにはそぐわないかもしれないが、これも現代における人間の道具。狩猟でもTやWebは大いに役立つのだ。

まずはグーグルマップの地形図表示機能や衛星写真でフィールドの環境を確認し、「ここは居ようだ」というエリアに見当を付けたら、そこが撃つて良い場所か、ハンターマップ※1で確認する（撃つて良い場所は色付けされていない）。獣の生息状況は、自治体や省庁が行っている調査報告がネット上に散らばっているので検索してみるといい。どの地域が濃い生息域なのか、これで確認可能だ。

ちなみに意外と知られていない機能だが、グーグルマップは衛星写真状態でコントロールキーを押しながらマップをドラッグすると3D表示になる。様々な角度から目当てのエリアの地形や高度を確認できるので、シカなら日当たりの良さそうな傾斜面や樹林の濃さ、人里に続く谷の距離などを、カモなら流速に影響する沢の地形や撃つた後の回収ポイント、里に近いエリアならストリートビューも駆使しておよその戦略が立てられる。

※1 撃つて良い場所、駄目な場所が記された「〇〇県鳥獣保護区等位置図(通称ハンターマップ)」という地図が都道府県ごとに用意されており、狩猟者登録を済ませると送られてくる。

スコープサイトで捉えるも
集中しきれなかったのが仇に



エゾジカをスコープで捉えた際のイメージ図。この状況で数秒間撃たないハンターは大バカ者である……。



使用銃器はサベージ220カモ柄ステンレスモデル。4倍スコープを載せている。グローブはBush Craft Inc.で取り扱いが始まるDeer Hunter社製で、銃の操作のために指が展開する。

思わぬ刺客が現れ 絶好の機会を逃す!?

北海道の広大なフィールドを考慮して、ここではクルマで走行しながらシカを探し、出合いがあれば撃つという「流し猟」を選択した。

初日でだいたいの地理を把握できたが、シカには出会えず。獲物肉がないひもじさに加えて気温はマイナス16℃を下回る。ただ、ブッシュクラフトスキルの向上を図るためにタープによる露営キャンプを決意。猟場、野営地付近にはヒグマのものとと思われる真新しい足跡がいくつもあつて緊張感が高まる。

野営地の火おこしには定番のティンダーウッズを使用する。マイナスイオンでも一発、本当にメタルマッチ1擦りで着火できる。ブッシュクラフトは前近代的なイメージを抱かれがちだが、今なおこの火口の着火性は第1級であることを確認した。ちなみにここではフィールダー×ブッシュクラフトインクのコラボで完成したFRI袋を使用している。詳細は今号の読者プレゼントページを見てほしい。

さて、薪にしている枯れ木も含めて、何もかもが凍り付いている氷点下の世界では、焚き火ひとつ放置はできず、安定した火力を得るまでにはある程度の火の育成が必要である。こんなときは太目の薪を地面に敷き詰めれば底面からの湿気を抑えることができるので試してほしい。燃料のほとんどはシラカバなので、一定温度を超えると太目の薪でも一気に炎上するから面白い。

リキヤンティーンボトルを湯たんぼとして使わず、そのまま寝てしまったため、翌日の飲料水確保にはまたないというミスも犯してしまった。つまり飲料水は全てガチガチに凍っているのである。

二日目は、早朝に牧場地帯のシカ柵間際でメスジカと出会う。

クルマのエンジンを止め、前方の山を双眼鏡で観察していたところだ。左の丘から耳がピラリと出てきたことに同行の撮影担当が気付く。徐々に頭を出し、こちらをうかがっている。停車前の走行音に気がつき、様子を見に来たのだろう。この間に、私は双眼鏡をレンジファインダー(レーザー式距離計)に持ち替え、シカまでの距離を測る。96メートル。スコープは100mで真ん中に合わせてある。最高の条件だ。鹿はソロソロと全貌を露わにし、頭を右に向け、その横っ腹をお披露目してくれた。

私は銃を構え、シカの上半身に照準を合わせた。頸椎・肺・心臓のいずれかに着弾するはずで、ほぼ即死で苦しまずに捉えられるはずだ。引き金を指をかけ、背後の状況を確認する。すると、なぜか私の背後の撮影担当は、両手で耳をふさいでいる。「カメラは!? ポケットに入れたでしょ!?!」

「自分の仕事に気づき、慌ててカメラを出すも「レンズキャップを外してないよ!」などというやり取りに5秒以上、いや10秒くらいは要したはずだ。私は銃を構え直し、「い



氷点下の気温に備えてティピー型に設置したBush Craft Inc.オリジナルギア「ORIGAMI TARP」。露営と狩猟を組み合わせると重装備となるが、ソリを引けば比較的楽だ。



「いかい?」と優しく問い、撃とうとしたその瞬間にメスジカは飛んで逃げていった。

私は、撮影に構わず撃てばよかったと、今でも強い後悔に苛まれている。状況がどうあれ、「撃つたのに撃たなかったのは私」なのである。狩猟そのものに集中できるハンターであれば……つまり読者諸君であれば、きっと右も左もわからない初めての北海道であっても、ガイド無しにはあるだろう。

その後、次なるチャンス願うもシカとの出会いはなく、日没まで成果につなげることはできなかった。



カウハンプックコバヤのブーコナイフと、シルキーフォックス170があれば焚き火に苦労しない。火つけはティンダーウッズ。それらをFielder×Bush Craft Inc.のコラボで完成したFRI袋に収納している。



キャンティーンカップクッカーは、持ち手を外すことができ、ペイルハンドルが付くのでグロブ無しでたき火調理が可能だ。たき火ゴトクを用いれば、安定した火床を実現。



BUSHCRAFT X HUNTING

先ほど戻ろうと考えていたポイントと再び訪れ、今度こそはとホフクに近い状態でポイントまで進む。岩の隙間から確認してみると、比較的事前に溜まっている。どうやら数羽いるうちの3羽ほどがオンドリの雄。「オンドリ夫婦」のごとくつがいだとすると、オンドリは6羽か。これは難しい。オンドリは狩猟鳥ではなく、撃ってはならない。そもそもカ

毛がいるのかどうか、頭を出して確認しよう。この日はある程度上流まで狩り登りしたところでキャンプを張り、翌日からの狩り下り戦略を立てて就寝する。今回も野営装備はタープのみだが、天候は雨。有効面積と焚き火の熱を取り入れることの2点を考えて、Aフレームの変形型を設営する。今回の調理は湯沸かし程度。この環境でBush Craft Inc.オリジナルギア「たき火ゴトク」と「キャンティーンカップクッカー」の組み合わせは、ブッシュクラフトにとって最強だろう。

弾丸ツアー待望の獲物はコガモのメス!



深く絡むカモ猟はとも面づく、二日でのフィールドの攻め方が大体わかってきた。成果は1羽のみと不甲斐ないのだが、初めてのフィールドならよしとしよう。



獲ったカモはすぐにナイフで腹を開いて内臓を抜き、550 Fire Cordで作したゲームハンガーで携行する。これは輪を自由に伸縮できる手錠のような構造だ。

二日目。狩り下りをはじめて午前8時過ぎ。昨日大量にカモが溜まっていたポイントに再訪する。昨日は思いのほか遠くにカモが溜まっていた射撃圏外だったという失敗から、今日はより奥のほうにポジションを変更してみる。しかし、カモの姿がない。と、あきらめて気を抜いた瞬間、たった一羽だが突如飛び去っていった。昨日の今日ではまだ居つく数が少なかつたようで、午後になつたらまた来ることにして下流へ向かう。

やはり、獣に気取られないためには単独が一番である。侵入ポイントからはカモの姿が確認できず半ばあきらめかけながらも、なるべく気配を殺して侵入。川の様子をそっと伺うと、遠目には確認できなかつたカモが一羽、水面を泳いでいる。コガモだ、こちらには気づいていない。カモが泳いでいく方向を確認して、獲物のペースに合わせて遮蔽物に身を隠しながら近づく。「この遮蔽物の後で銃を構えていれば、カモのほうから姿を現すはず」計算どおり、カモが姿を現した。先の「クルマ理論」により、私は半身だけ出してじっとしているのでカモは気付かない。

慎重を期して降りる。またしてもオンドリ、今度は雄が2羽いる。これはスルーして砂の丘のポイントへ。飛び出してみるのが何も動きはない。あとは、ウエーディングで渡河し、上流側に向かって終わりとなるのだが、やはり水面にカモの姿は見えない。もうダメか……。完全に気が抜けてしまい、フツと岩陰から先を見たらそのとき、45mほど先の岩の上に大量のコガモが居ついていて、おそらく就寝しようとしていた。「げっ！」

毎日追われて警戒中の激ムズ鴨を狙う [関東] 弾丸カモ猟ツアー



北海道の反省を胸に 今度はカモを狙い撃ち

北海道では成果に恵まれず、このままではネタ不足だろうと単独でも手軽に楽しめるカモ撃ちに挑戦した。これもまた、初めての場所に立ち、場合によっては地主に交渉しながら戦略を立てていく2日間の弾丸ツアースタイルだ。回収用のインフレーターポットや待ち伏せ網で使うデコイ、カモ笛は、北海道から陸送中のランクルの中に入れてしまったので今回は使用不可。北海道で、余裕があれば湖でカモのデコイでもしようと考えていたのが仇となった。つまり、カモも忍び猟しかトライできないわけである。

回収を考えると、現状の装備では深流釣りを使うウエダー+磯釣り用の伸縮タモ(6m)で回収できる場所でないならならぬという制限もある。私の知る限り、これに対応できそうな「撃つて良い場所」は一か所だけだ。数年前に何度かカモ撃ちをした川だが、深く知っているフィールドではない。早速グーグル先生にお願ひして、地形や侵入ポイントを探っていく。

初日はアタリを付けた場所を探っていくながら、現場の状況を再確認していく。やはり数年前に数回来ただけの場所では、地形の変化やカモの居場所のバリエーションに対応できず、失敗が続く。最初に見つけたカモの溜まりでは、コガモが3羽、遠くの茂みから見える良い場所を泳いでいた。泳ぐ方向を確認しながら、遮蔽物を利用して

カモの視界に入らないよう回り込んでいくが、後続のカメラマンの気配を察知して飛び去ってしまう。私の気配を察知したなら飛び立つ瞬間に私も気づくのだが、今回は遮蔽物に隠れている私から見える場所を飛んで行った。その後もグーグルマップで見当をつけたポイントに戻るが、地形の掌握ができておらず、先に気付かれて飛ばれたり、想定よりも遠くにカモが溜まっていたりと成果につながらないまま一日を終えた。ただ、見当を付けているポイントには必ずといっていいほどカモが溜まっていた。やはりポイントは地形と流れである。ちなみにカモは人間よりも目が良く、野生の個体によっても気づかれると一斉に飛び去ってしまう。飛び去らないカモは、その場所が禁猟だとわかっているか、あるいは人間がクルマなどに乗っかっているか、形を認識できていないか、である。もしその場でクルマから降りるなら、カモとは反対側のドアからこっそり出るなどの工夫が必要である。

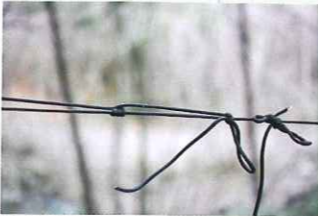
認しようにもすぐさま飛ばれてしまうだろう。こうなれば一気に飛び出して、確認と射殺を同時に行うしかない。意を決して飛び出したが、逃げようとバタバタしているところを一瞬見たところで、どれが狩猟鳥なのかさっぱりわからない……。特徴的なオンドリの雄以外は全て同じに見える。一羽だけマガモのメスと思われる大きな個体があったが、それも遠くのうちに飛び去ってしまった。もう時間的に後がない。実績がある先のポイントに戻り、別集団が休んでいることを祈る。



タープのリッジラインは550 Fire Cordを独自のトラッカーズヒッチを用いて3倍力で引く。軽いタープでもパラコードのように伸びる紐ならこのくらい張ると安定する。



元となるアンカーは引き解けにしたエバンスノットがお勧め。特に太い樹木に細いロープではクロープヒッチでは利きにくい。また、エバンスのほうが必要なロープ長が少ない。



屋根部を地面ではなく立木と連結して解放する場合、ロープに高いテンションはいらぬ。立ち木に直接トラインヒッチで結びつけると良い。自在のように張りを調節できる。

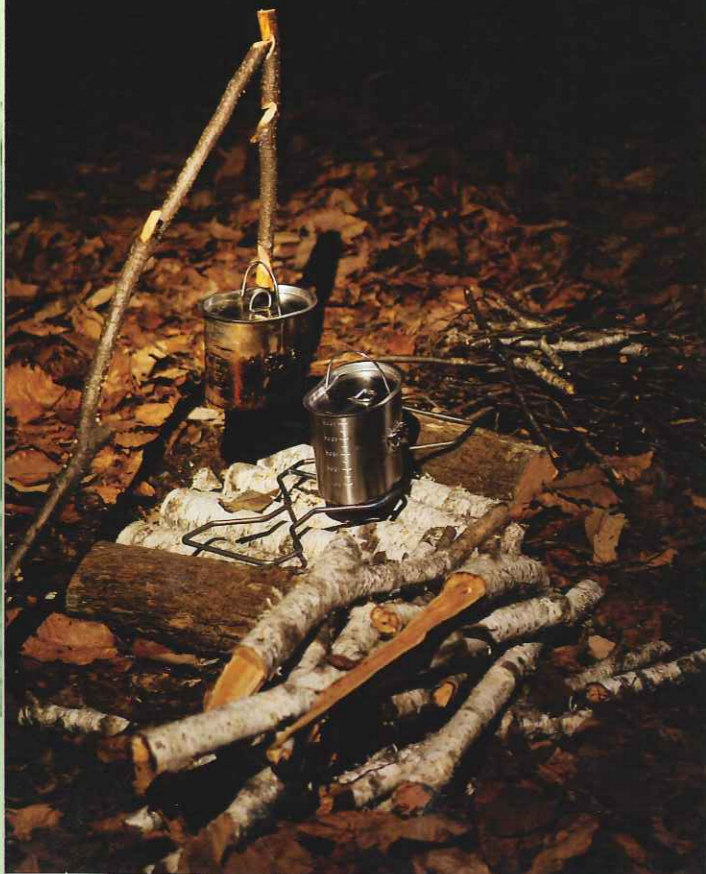


タープにはクレイムハイトを小枝一つで施工できる独自の「トグルフック」が要所に備わっている。これは地面にベグで固定する際の短なガイロープとしても使うことができる。



タープはAフレームの変形型。焚き火の熱を取り込みながらも、雨に対する有効面積を最大化した結果だ。雨が溜まりにくいようにタープ中央を吊っている。

ブッシュクラフトと現地調達で
充実の調理環境を整える



今回はポットフックハンガーと焚き火コトクを使って、飯盒炊飯、スープ仕込み、鉄板焼きの3品を同時に調理。手持ちギアとブッシュクラフトスキルの共演で快適な調理環境が整う。

今回のポットフックハンガーと焚き火コトクを使って、飯盒炊飯、スープ仕込み、鉄板焼きの3品を同時に調理。手持ちギアとブッシュクラフトスキルの共演で快適な調理環境が整う。



青首3羽は、異種混同の群れから1羽1発で選別して撃ち分けた。キジも一日の捕獲上限2羽を犬なしで狩る。昼前に初めて15時には終獲。もちろん野生であり放鳥ではない。



木からリッジラインを地面にベグダウンして、Aフレームの片側を下げた状態としている。柔軟性に富むナイロンの伸びを利用した設営で、雪の吹込みを最小限に抑えた。

しながら、緩やかな尾根に上り、居そうなエリアを忍び始める。読み通り、笹の群生地帯に獣道と寝床がたくさん点在している。だが、今日のこの時間、ここには居ないようだ。見通しも良いので、先に気取られて逃げていくかもしれない。



持参したカモは全身をバラバラにしてスープに投入。良い出汁が出る。胸肉はスライスして塩胡椒を振り、焼肉にして食べる。



米は二合炊いたが、十分に焼肉があるので残さず食べる。カモの出汁には粉末のミソを加えると格別である。

弾を装填する。同時にスコープのレンズキャップを開放するが、前方のキャップを開き損ねた。クソ！キャップを開き、照準を合わせようとするが、シカはすでに走っており60mほどの距離で森に消えていく。無駄に撃っては銃声で他の個体も逃げてしまうから発砲は控える。

これに懲りた私はスコープからレンズキャップを外し、銃も常に手に持って歩いた。その後、気配はあるものの姿は確認できず、昼前には15名ほどの猟師グループと遭遇。この時間から始めるとは、それなりに濃いポイントなのだろう。私は素直に謝罪し、現場

を荒らしても、発砲もしていないことを伝え、シカとの遭遇場所と逃げていった方向を情報提供し、すぐに私が撤収することで穏便に収まった。あと4時間あれば、もう一度くらい出会いを期待できたのだが、地元猟友会の邪魔をするわけにはいかない。ハンターの世界には縄張りというものがあって、法で決まっているわけでも、ほとんどの場合は地主でもないのだが、暗黙のルール、マナーとして棲み分けがあるのだ。

もちろん、釣りと同じで誰がどこでやるかと自由だが、それでも地元グループに筋を通しておかないとトラブルの元にはなる。本当は自由に遠征したいのだが……。私は甲信越では別のグループに属しているが、初めてのエリアでも地元猟友会が入っているような場合は事前に相談し、グループ狩を行う日以外でやらせてもらうか、せいぜい土日祝日は避けて、週末のフィールドに影響を残さない配慮はしたい。平日なら見知らぬ地での地元ハンターとの遭遇率もグッとさがる。

今回、地元のグループが使っている侵入ポイントも、勢子が行った方面も、立間が付いている場所も、私が読んだ通りのポイントだったから、やはり鹿狙いでは地形と水場の場所が重要であるとわかった。結果的に撃ち損じたわけだが、私の読みが正しいなら、シカは沢地形の突き上げ付近が好きであり、その付近の尾根と沢を行き来するように居ていることが多い。

結果が全てならばお見せしよう
犬なし単独3時間で
カモとキジを大量ゲット

わざわざ難しいことに挑戦した挙句に結果がコガモ1羽では読者諸兄に不信感を与えそうだったので、編集部に告げずに猟果重視で出猟した。内容に派手さはないが、マイナス5℃以下となった甲信越の山中で露営キャンプを行い、初めての地で流しの鳥撃ちに挑戦。カメラは私のスマホのみで臨場感ある写真など撮影していない。犬なしの正味3時間で、青首(マガモ)3羽とキジ2羽を撃ち獲り、きちんと猟果を出せるハンターであることの証明とする。

シカの通り道を塞ぐ
一芸ありの即席ベース



地形を読んで懐に忍び込む

【甲信越】
弾丸忍び猟ツアー

BUSHCRAFT × HUNTING



当日は晴れる予報だったが、急な雨に対応して中央にキャンティーンボトルをつり下げて雨樋を作る。銃はバイポットで据えたボルトオープン状態で隠しておく。



最後の挑戦は高難度な
道なき道を行く忍び猟

この遠征、まだ納得がいかない。さて、今回もグーグルマップで現地を調査し、初日は昼頃から現地入り。クルマで林道を走りながら事前調査でわかっている情報と照らし合わせてみる。予想どおり、いかにも居そうな場所だ。今回は初めての山を徒歩移動しながら鹿を探するため、GPSロガーを持ち込んでみる。道迷いというか、道が無いので、絶対に山中で迷わないためのアイテムとして必要になる。

野営のポイントを決める。鹿柵より山側だが、夜になって山から下りてくるシカが通りそうなポイントを選んだ(案の定、翌日は地元猟師グループが待ち伏せポイントにしていた)。ここで野営することでシカを通さず、何なら今日はもうここより下るな、と示したかったのだ。これで多少は閉じ込め効果があるかもしれない。天気は良かったのでタープは簡単な差掛け型。就寝中の急変にだけ備えて、雨が溜まらないようにキャンティーンボトルをつり下げて重りにし、屋根に雨樋の効果を持たせた。

に隠しておく。これでカバーしたのと同じ効果があり、緊急避難時には即座に手に取ることが可能だ。夕飯は、ポットフックハンガーと焚き火コトクを使って、キャンティーンカップクッカーを使用。まだ重産前の試作サンプルを持ち込んだが、やはり出来が良い。キャンティーンカップの不満点を帳消しにしている。フッ素コートもしており、ごはんがベタベタくっつくこともなく、快適な炊飯となった。もちろん、火おこしには、便利なティンダーウツドだ。

夕飯を終えたら、残飯やクッカーは全て車内にしま込む。これはクマ対策である。銃を持っているとは言え、寝込みを襲われたらひとたまりもない。就寝準備中に、早速ガサゴソと尾根のほうからケモノの気配がする。やはりここが水場への通り道のようなのである。また明日会おうと心の中で誓い、就寝した。

翌日になり、発砲時間になっても他にハンターの気配はない。聞いていたとおり、縄張りには空気が多いようだ。GPSロガーで現在地を確認